

代々木病院の理念

ヒューマニズムにもと
づく医療・介護の実践

くらしと健康

発行 医療法人財団 東京勤労者医療会 1部60円

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-30-7

TEL (3404)7661

E-mail address yo_sosiki@tokyo-kinikai.com

友の会会員は会費に購読料がふくまれています。

代々木病院とともに歩んで

女性医師の育成に願い託し

時代を切り拓き、元気で活躍中の 結城千草医師 (内科医) に聞く



編集部がいつも患者と真摯に向き合い、民医連医療、内科の第一線で熱心に医療を続けてきた結城千草医師に、ぜひインタビューをとリクエストすると「民医連の医師が患者と真摯に向き合うのは当たり前。私に特徴があるとすれば、代々木病院の一番長い常勤医師ということですね。入職は1962年。つまり48年目ですね」と話が始まりました。(編集部)

なぜ医師に
* 師になることを目指しました」と語ります。

医師として

「子供時代、つまり戦前は職業につく女性が少なく、主婦になるのが当たり前。でも主婦業が嫌いな私は、何とか自立した仕事を持ちたいと考えました。子供心に、男性と同じ評価を得るには教師か医師しかないと考え、医師の抑圧に反対する闘い

糖尿病外来の
医師として

「現在糖尿病の専門医を担当して37年以上。心がけているのは患者の目線で話を聞くこと。」「生活全般を見ていくためには、患者さんの状況、要求をよく知ること、そこから糖尿病医師としての仕事が始まると思います。」「医師とチームワークを組む医療従事者全ての心構えです。」

最近の糖尿病
治療について

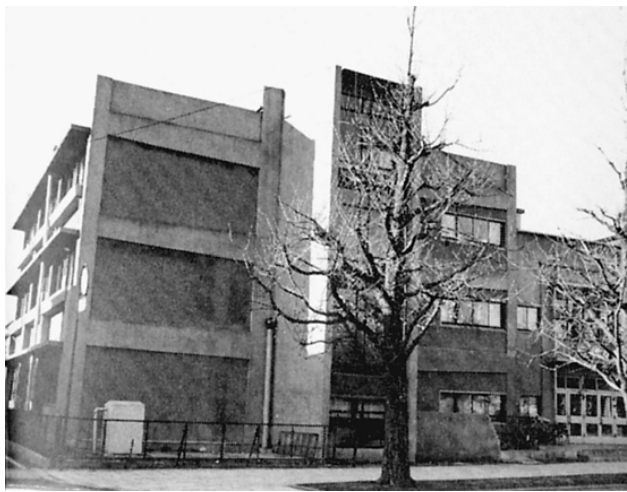
「最近、新しい薬ができています。しかし、

女性医師が
育ってほしい

薬だけに頼ってはいけません。基本は食事を中心とした毎日の生活を改善することです」ときっぱり話します。専門医37年以上のキャリアからの言葉です。



開設当時の代々木診療所 (スケッチ: 佐藤猛夫) (1945年9月)



結城医師が入職当時の代々木病院 (1962年撮)

若さを保つ
秘訣は

「皆さんが若いと言っています。」「語りの口は淡々としていますが、激動の時代に自分の意志を貫くのは大変だったろうと容易に想像できません。アメリカ占領下の学生運動の経験や子育て時代の経験。もっともっと話しが聞きたい、そして結城医師とその仲間が時代を切り開いてきたように私たちもその隊列に続けたいと強く感じました。」

「子育てをしながら医師の仕事をしてきた結城医師は「今でも女性医師の育つ環境は非常に困難が多い。働きながら自分で環境を作っていく努力なしでは続けられません。」「一番は保育所等の増加を要求してゆく社会環境作りが大事です。働きながら子育てできる社会をつくる。そのため

水無月。最も生命あふれる季節だったのに、自然界が「沈黙の春」(レーチエル・カーソン)になって久しい。ひとり人間界のみ騒がしい。政党もどきが次々と誕生している。実態は自民党の自壊現象で、生き残るも危なっかしい▼民主党の評判も最悪、そして気の毒。直面している難問はすべて55年間の自民党政権がつくりだしたものである▼アレ!と思ふのは民主党内の意見の対立が、公開されていること。だから「指導力不足」が一層目立つってしまった。だが、これっていい事なのではあるまいか。不満は多々あれど、組織の意向には黙って身を託す、日本的良厚の方がおかしいのではあるまいか▼政党乱立し連立をくりかえすイタリアは本格的にみると危なっかしい。イタリア人はいい。英米国人は気の毒だ。選べる政党が二つしかない。果たしてはたしてどちらが真に民意を反映できる「仕組み」なのであろうか。選択肢の多さ、決定過程の公開は民主主義の核である。しばし見守るべきであらう。(ま)